書字（エクリチュール）の力学

亀澤　孝幸

一　共通語（リンガ・フランカ）としての漢字・漢文

世界史は東から西へと発展したと嘯くヘーゲルは、象形文字から表音文字への「進化」を文明の発展過程に重ね合わせる。ゆえに、かれにとって表音文字こそが文字の理想的な形態である。「表音文字のほうが文句なく知的である。知性に固有の、知性にもっともふさわしい、観念の表現形式たる「単語」は、表音文字においてこそ意識にもたらされ、反省の対象となる」[注1]。

しかし、西洋の文字が表意性を捨てて完全な表音化に至ったのは、まったくの偶然にすぎない。それは、多数の民族が興亡した古代地中海世界において、各民族が自分たちの言葉を表記するために、言語を異にする他民族の文字の借用と適用をくりかえした結果であるからだ。

他方、漢字は、殷代の甲骨文にすでに仮借字や形声字があまねく見られるように、その初期段階から表音的な機能を具えていた。それにもかかわらず、完全な表音化の方向へと進むことがなかったのは、民族的同一性によるものではむろんない。元や清のような異民族による征服王朝さえあったのだから。実際、両王朝とも漢字を排除しようとした。だが結局は、漢字の力に屈したというべきだろう。両王朝は体制の維持のために漢字を使い続けざるをえなかっ

た。かくて漢字および漢文は、古代から今日に至るまで、書記言語としての基本的な体系を変えることなく維持してきたのである。その歴史的事実は、ヨーロッパの諸言語に照らし合わせてみるとき、驚くべきことである。ところが、ついにアルファベット化することがなかった漢字は、東洋に先んじて近代化を遂げた西洋にとって、遅れた文明の象徴とみなされることにもなった。ヘーゲルはつぎのように漢字の非合理性をあげつらっている。

〔中国の〕文字の性質からして学問の発展を大きく阻害するものです。いや、むしろ逆で、真の学問的関心がなかったために、思想と表現と伝達にふさわしい道具が作られなかった、というべきかもしれません。（……）一見すると、漢字は大きな利点をそなえているかに見え、ライプニッツをはじめとする多くの偉人たちが感心しています。が、利点などどこにもない。文字とそれらがあらわす音を比較しただけでその欠点はあきらかで、文字と音が分離している中国語では、そのむすびつきがきわめて不完全です。(注2)

こうした見方に反して、和辻哲郎は中国が文化的同一性を維持してきた「窮極の根拠」を漢字に帰している。少し長くなるが、煩を厭わず引用しよう。

言語は必ずしも音声によって表現せられねばならぬのではない。従って音声を表示する記号のみが文字なのではない。音声の媒介を経ずに直接に意味を現わしても、それは文字としての資格に欠くるところはない。もしかかる形象が使用上においても大なる不便なく作り出されるならば、それは文字としてはむしろその本質に忠なるものと言わねばならぬ。漢字は直観性と抽象性との適度なる交錯によって、ちょうどかかる形象として成功したも

のなのである。そうしてひとたびかかる文字が成立するとともに、それは音綴文字とははなはだしく異なった効用を発揮し始める。すなわち同一の文字が音声的に異なった言語を表現し得るということである。言語が地方的にいかに異なった訛りを帯びて来ようとも、文字的表現においては常に同一であり得る。また時代的に発音が変遷して行っても、文字は毫も変わらないでいることができる。かかる漢字の機能のゆえに、シナの地域における方言の著しい相違や、また時代的な著しい言語の変遷が、かなりの程度まで隠されていると言ってよいのである。現代のシナにおいて、もし語られる通りに音表文字をもって現わしたならば、その言語の多様なることは現代のヨーロッパの比ではないであろう。またもしシナの古語が音表文字をもって記されていたならば、先秦や秦漢や唐宋などの言語が現代の言語と異なることは、ギリシア語やラテン語やゲルマン語が現代ヨーロッパ語と異なるに譲らないであろう。しかるに漢字はこれら一切の相違を貫ぬいて共通なのである。すなわち「書かれた言葉」が地方的時代的に同一なのである。言いかえればシナの地域においては二千数百年の間同一の言語が支配した。これは一つの文化圏の統一を示すものとしては、無視することのできない有力なものに見える。ここに我々は先秦の文化や漢文化が一つの文化の異なった時代と考えられる窮極の根拠を見いだし得ると思う。(注3)

つまり和辻は、中国という政治的統一体の存在によって漢字が生き延びてきたのではなく、その逆に、漢字のおかげでその体制が命脈を保ってきたというのだ。ここで重要なのは、漢字が異質な文化を統合する力をもつという点である。それは音声言語を異にする異民族をも同質の文化に包含する力である。それによって中国は、たとえ征服王朝による支配をたびたび受けたにもかかわらず、連続性を保ってきたのである。それだけではない。漢字は、朝鮮、ヴェトナム、日本などの周辺諸国にも受け入れられ、東アジアに一大文化圏を築くに至った。漢字・漢文という共通

の書記言語、いわば共通語（リンガ・フランカ）によって、中国で育まれ蓄積された膨大な知が共有されることになった。

しかし、またそれは、漢字・漢文による書字が否応なしに政治的な力を孕むことを意味する。中国歴代王朝は、漢字・漢文を統治の原理として利用してきたのだから。法やイデオロギーは、文字を媒体にして異質な他者を馴致する。次節で論じるように、この書字の力を発揮することによって、中国文明を維持してきたのが「史」に淵源する官僚層であった。

われわれが関心を寄せる「芸術」としての書も、この政治的な力と無関係には存在しえない。実際、わたしたちが鑑賞の対象とする書の作品の多くは政治的モニュメントである。政治的なものは美的なヴェールをまとって掲げられる。書の芸術性は、政治性と隠微な共犯関係にあるのだ。

また、どのような書がすぐれ、あるいは劣っているのかを判断する「美学」も、つねに政治的なものとの力学関係において存する。むしろ、そこに生じる緊張こそが中国の書のアプリオリな条件であり、また、その力の源泉でもある。それを無視するなら、書の本質を見誤ることになるだろう。

二　「史」と書字

したがって、ヘーゲルの偏見に満ちたつぎのような言葉が、一面の真実を言い当てていることを認めなければならない。

中国人のような精神形成の停滞した民族にとってしか、象形文字はふさわしくない。しかも、この種の書きこと

ばを読み書きできるのは、精神文化を自分たちだけの占有物とする、ごく一部の特権階級に限られる。[注4]

習得が困難であるからこそ、書字の能力を身につけた者は、それを独占することによって力をもった。それは専門的な知識であり技能であった。それを支えたのが、「史」の系譜につらなる官僚層の存在である。

中国古代の伝説によれば、漢字を発明した蒼頡は黄帝に仕える「史」（書記官）であったという。[注5] 殷代以来、文字の取り扱いは特定の職能集団によって担われ、かれらがその知識と技能を独占していた。殷代の甲骨文はたんに宗教的な占いの記録であるのではなく、祭司長たる王が神託を受けてさまざまな政治を執り行った記録でもある。この文字を記した者たちがいかなる立場にあって、何と呼ばれていたかはよくわかっていないが、のちに「史」と呼ばれる職掌との繋がりを想定することはなお可能だろう。

たとえば、春秋時代の晋国の遺跡から出土した《侯馬盟書》には、「巫」「覡（げき）」「祝」といった巫術（シャーマニズム）的な起源をもつ神官と並んで「史」という職官が記されている。平勢隆郎によれば、「これらは、祭祀を司る者たちである。本来盟誓参加者が所属した国の祭祀の場で、祭祀を行っていた。そのうちの「史」が（……）文字書きである。そうした者たちが各国にいるから、盟誓を行った後、盟書を作って持ち帰り、祭祀の場で内容が確認できる」。[注6] かれらが執り行う祭祀の場において、神の下に諸侯間で盟誓が交わされ、盟書として記録が残された。ここから、太古の宗教観念が希薄化し、すでに実務的な書記官としての「史」という名称が一般化した春秋時代にも、なおある種の呪術的な技能を有する神官としての観念が残っていたことがわかる。かれら「史」こそが〝書家〟の祖であるといってよい。宮崎市定はつぎのように書いている。

後世、最古の権威ある史料として尊崇された『書経』の各篇は、いずれも帝王の史官の手になった記録であると認められる。中国の文字というものが、そもそもこの史官が世襲的に掌っていたものである。帝王の記録たる『書経』が永く後世に伝えられたのは、私の個人的な考えによれば、それが模範文として保存され、文字を習う手本として用いられたからであると思われる。その内容は帝王個人のみならず、国家の大事に関する祭祀や軍令であり、少しく文字を置きかえることによって、新たな場合に応用されえたものであろう。(注7)

周王朝の官制を記したとされる『周礼』には、祭祀官を列記した「春官」のもとに、書記官の長である「大史」をはじめ、「小史」「内史」「外史」「御史」といった史官の職制がみえる。むろん『周礼』は、実際には戦国時代に成った書物であり、儒家が潤色を加えた理想の官制を示したものであるが、前漢に儒教が国家の正統的なイデオロギーとして認められて以降、そうした「史」の観念が受け継がれた。『説文解字』序に「尉律に、学僮十七已上、始めて試み、書九千字を諷籀すれば、乃ち史為るを得。又た八体を以て之に試み、郡は大史に移し并せて課し、最なる者は以て尚書令と為す」とあるように、秦漢の頃、史として採用されるには、九千字に及ぶ法律の文章を暗記しなければならず、しかも大史となるには八つの書体を書き分けることができなければならなかった。ここでいう「八体」とは、許慎が「秦の八体」と呼ぶもので、大篆、小篆、刻符、虫書、摹印、署書、殳(しゅ)書、隷書をいう。その名から想像されるように、正式な書体である大篆・小篆と実用通行体の隷書のほか、さまざまな用途・媒体に応じて異なる書体が用いられていた。それは、それぞれの書体に固有の〝書法〟をも同時に身につけなければならないということを意味する。許慎は、当時すでに伝統的な「小学」(文字の知識)がなおざりにされていることを嘆いている。だが、官吏として立つために正統な書体と書法に精通する必要があることは、隋代に成立し、清朝が滅ぶまで続いた官吏登用制度

である科挙においても変わることはなかった。そして、こうして生まれた一握りの識字層は、書物に記された知識を占有し、文書行政による上意下達の強固な官僚制を支えた。かれらは、古代においては祭司であり、秦漢以降は官僚であった。

「史」「吏」「事」はいずれも「史」を構成要素に含む同系の文字である。『説文』では、「史」は「事を記す者なり」、「吏」は「人を治むる者なり」、「事」は「職なり」と説かれている。ゆえに、字源的にいっても、官吏の祖は史である。官僚の力は、何よりも書字の知識と技能に由来するのである。

史は歴史を記すことに対して非常な執念を燃やした。中国ほど史書が著されてきた文明はほかにない。『礼記』玉藻に「動けば則ち左史之を書し、云えば則ち右史之を書す」といい、『漢書』芸文志に「古の王者に世よ史官有り。君の挙は必ず書す。言行を慎み法式を昭かにする所以なり。左史は言を記し、右史は事を記す。事を春秋と為し、言を尚書と為す。帝王、之に同じからざること莫し」というように、古来、史は権力者の言動を逐一記録した。『尚書』のなかの「周書」や、『逸周書』として伝わる文献は、そうした史たちによる周王朝の記録に基づいている。春秋時代になると、それまではほとんど周王室の独占的な知識であった漢字が広域的に普及し、各国で歴史が記録されるようになった。そうした記録は、戦国時代に書物の形にまとめられ、魯の年代記『春秋』や魏の『竹書紀年』など、今日その一部が伝わっている。

史は、少なくとも建前上は、王にとって不都合なことであっても、ありのままに事実を記し伝えることを本分とした。『左伝』は、権力者の圧力に屈することなく、事実を記録することに命をかけた大史三兄弟の話を伝えている（襄公二十五年）。春秋時代、斉の崔杼（さいちょ）は、かれが主君の荘公を殺したことを記録に書いた大史を殺した。兄の後を継いだ弟も同じことを書いたので、崔杼はこの弟も殺した。ところがかれらの末弟がみたび同じことを書き記したの

で、ついに崔杼はこれを許した。大史兄弟が殺されたと聞いた別の史が竹簡をもって駆けつけたが、すでに正しく記録されたことを聞いて帰っていったという。(注8)

このような古代の史官のエートスは、後世の歴史家たちにも受け継がれた。後漢の明帝以降、皇帝の挙動は「起居注」として記録され、正史を書くための基礎史料とされたが、それは皇帝が求めても閲覧がかなわなかったという。たとえば唐の太宗は、諫議大夫であり起居注の主管でもあった褚遂良にその記録を見せてくれないかと尋ねたところ、「今の起居は、古の左右史にして、以て人君の言行を記す。善悪必ず書し、人主の非法を為さざらんことを庶幾(こいねが)う。帝王の躬(み)、自ら史を観るを聞かず」(注9)と諫められたという(『貞観政要』論文史や『旧唐書』巻八十・褚遂良伝などにみえる)。

司馬遷の『史記』以降、各王朝の歴史は、つづく王朝において正史としてまとめられることが定着した。それはある程度は権力者による恣意的な捏造や粉飾を防ぎ、歴史記録の客観性を担保する仕組みとして機能した。のみならず、歴代の皇帝はつねに後世の評価に晒されることを意識して政治を執り行わなければならなかったのである。太宗は「朕、若し事を制し令を出し、人に益有る者は、史則ち之を書し、不朽と為るに足らん。若し事、古を師とせず、政を乱り物を害せば、詞藻〔すぐれた詩文〕有りと雖も、終に後代の笑いを貽(のこ)さん」(『貞観政要』論文史)と述べている。こうした権力者の倫理は、近代西洋の知識人の目にも驚嘆すべきものとして映ったようだ。マテオ・リッチ以来のイエズス会宣教師たちの報告を通して中国文化の実態に触れたライプニッツは、清の康熙帝について、つぎのように書いている。(注10)

現在においてすべての権力をもっている偉大な皇帝が、後代の人間に対して宗教的なまでの恐れを抱き、ヨー

ロッパの皇帝が等族会議や議会を気にする以上に、正史に載せられるであろう記述を気にし、皇帝の治世を記すための材料の蒐集を任とする史官が、後世のそしりをよぶ恐れのある記録を、いったん密封されればもう誰も手が触れられない箱にしまい込みはしないかと真剣にうれえているのをみることほど報告のしがいがあることが他にあるだろうか。(注11)

中国の史官が絶対的な権力を握る皇帝をも抑制しうるほどの力をもちえたのは、書字の力によるものにほかならない。中国における武官に対する文官の優位は、ヨーロッパにおいて騎士が貴族階級に属したことや、日本では鎌倉時代以降、武家が政権を握り、武士の身分が高かったことに鑑みれば、特異なこととといわなければならない。孔子以来、殷王朝を武力で倒した武王ではなく、周王朝の礼楽制度を築き上げた文王およびそれを補佐した周公が尊敬の対象とされた。『論語』には、孔子が理想とした周王朝の文化の理念を「文」と名指し、「道」と並んで重んじていることが見いだされる。前近代の中国においては、「武」よりも「文」が尊重され、実際に力をもったのである。

異民族による征服王朝は武力によって前王朝を滅ぼしたが、権力を手にすると漢民族の文化を尊重し、多くはそれに順応しようと努めた。これは、一面からみれば、「夷狄」による「中華」への憧憬として捉えられるが、別の面からみれば、行政を担う文官の官僚層が強固に存在しており、いかなる強大な権力をもってしてもかれらを斥けることができなかったことを示している。たとえばモンゴル人による征服王朝である元は折衷的な漢化政策を採ったが、科挙を排し、新たにパクパ文字（パスパ文字）を国字に定め、諸機関の長官にすべてモンゴル人を充てるなどして、既存の官僚層の力を抑えようとした。だが結局、パクパ文字はほとんど実用化されることはなく、結局は従来通り漢字を使わざるをえなかった。国家運営においては、実際に行政を担う文官からなる官僚層に依存していたからである。

各時代における主な書の担い手は、殷周から春秋にかけては神官、戦国から秦漢では史官、魏晋南北朝から隋唐では貴族、宋以降は科挙官僚というように変遷してきた。しかし、かれらがいずれも国家の統治を支える実質的な官僚層であることに変わりはなかった。書は、かれらが国家統治のために維持した書字文化に付随的に存在したのであり、また、基本的にその限りで尊ばれたのである。それゆえ無名の工人による書は蔑まれ、批評の対象にもされなかった。

ライプニッツは、先の引用のすぐ後で、やはり康熙帝について、つぎのように書いている。

> 彼は中国のあらゆる学問を子供のときから、驚くべき勤勉さで習得したので、栄誉と官位を与えるための官吏登用試験において、すぐれた試験官ぶりを発揮した。また彼は自らの意見を、すばらしい筆蹟で（これは中国人の間では最高の教養をもっていることのあかしである）書くことができた。(注12)

いまやそのような共通認識はほとんど消滅してしまったが、かつて東アジア世界において、書を善くすることは「最高の教養を持っていることのあかし」であった。

三　書字の貶下

こうした書字文化の歴史に鑑みれば、中国において、文字や書くことの価値を積極的に肯定する思想が育まれてきたと考えてもおかしくはない。ところが、いわゆる中国哲学の伝統において、書字の問題はほとんどまともに論じら

れてこなかった。むしろ、書字について否定的な思想の伝統が強固に存在してきたのである。たとえば『荘子』天道につぎのような章節がある。[注13]

世の道に貴ぶ所の者は書なり。書は語に過ぎず。語は貴ぶ有り。語の貴ぶ所の者は意なり。意は随う所有り。意の随う所の者は、言を以て伝うべからざるなり。而も世は因りて言を貴び、書を伝う。世は之を貴ぶと雖も、我猶お貴ぶに足らずとするなり。其の貴ぶべきに非ざるを貴ぶが為なり。

ここでいう「書」とは、文字ないし書物、あるいはそれらを通して学ばれる知識を指し、「語」と「言」はともに声による言葉すなわち音声言語を指すと解しうる。つまり、「書」は「語」ないし「言」を書き留める道具にすぎず、また「語」において大切なのは「意」を伝えることである。そして、「意」は「言」によっては伝えられず、ましてや「書」を貴ぶのは論外である。

このような主張は儒家を主たる標的とした批判であると思われるが、当の儒家の経典とされる『易経』繫辞下伝の「子曰く、書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」という一節にもほぼ同型の思想がみられることに注意される。ただし、後者はたんに言語や文字を否定するのではなく、聖人が作った「象」がそれらを超えて「意」を表現し伝達することができるのだと主張する。「然らばすなわち聖人の意は、それ見るべからざるか。子曰く、聖人象を立てて以て意を尽くし、卦を設けて以て情偽を尽くし、辞を繫けて以て言を尽くし、変じて之を通じて以て利を尽くし、之を鼓し之を舞して以て神を尽くす、と」。つまり、『易経』繫辞下伝のこの部分は、『荘子』の言語哲学を「象」の導入によって揚棄するものとしても読めるのだが、いずれにせよ『荘子』と『易経』に共通するのは、「意」―「言」―

「書」という階層的な言語観であって、「書」が見下されているということである。

『荘子』と同じく淮南王劉安の主導によってまとめられた『淮南子』本経訓にみえる「蒼頡の書を造るや、天は粟を雨ふらせ、鬼は夜哭す」という神話的伝説は、「偽の生ずるに及んで、知を飾りて以て愚を驚かす」という上文と高誘の注とを踏まえれば、文字という新しい技術が人々を堕落させたことを象徴的に物語る。ここにプラトンの『パイドロス』の一節を注釈として挿入しても違和感はないだろう。

> 人々がこの文字というものを学ぶと、記憶力の訓練がなおざりにされるため、その人たちの魂の中には、忘れっぽい性質が植えつけられる（……）。それはほかでもない、彼らは、書いたものを信頼して、ものを思い出すために、自分以外のものに彫りつけられたしるしによって外から思い出すようになり、自分で自分の力によって内から思い出すことをしないようになるからである。じじつ、あなたが発明したのは、記憶の秘訣ではなくて、想起の秘訣なのだ。また他方、あなたがこれを学ぶ人たちに与える知恵というのは、知恵の外見であって、真実の知恵ではない。(注14)

中国において、文字や書に対する否定的な見方は、その後も長く受け継がれた。のちに禅仏教が「不立文字」を唱えたのも、そのような思想の系譜に位置づけうる。

プラトンは『パイドロス』において、「ものを知っている人が語る、生命をもち、魂をもった言葉」に対比させるかたちで、「書かれた言葉は、これの影である」(注15)と登場人物に語らせている。そこでプラトンは、書かれた言葉がもつ負の側面をあれこれ挙げている。たとえば、書かれた言葉は、絵画と同じように、何かを尋ねてみても「いとも尊

大に沈黙して答えない[注16]」。さらに「言葉というものは、ひとたび書きものにされると、どんな言葉でも、それを理解する人々のところであろうと、ぜんぜん不適当な人々のところであろうとおかまいなしに、転々とめぐり歩く。そして、ぜひ話しかけなければならない人々にだけ話しかけ、そうでない人々には黙っているということができない。あやまって取りあつかわれたり、不当にののしられたりしたときには、いつでも、父親である書いた本人のたすけを必要とする。自分だけの力では、身をまもることも自分をたすけることもできないのだから[注17]」。

ヘーゲルが表音文字の優位を説くのは、プラトン以来の西洋哲学の伝統を受け継ぐものである。

（……）表音文字の読み書きの学習が測りしれないほどの貴重な教育手段となる（……）。というのも、その学習に際して、精神は感覚的な具体物からもっと形式的なもの――音となった単語や、その抽象的な要素――へと注意をむけ、内面性の土台を主観のうちに据えて純化する、という本質的な作業にとりかかるからである[注18]。

ヘーゲルにとって、文字はあくまで声の代替物にすぎない。かれは、声の直接的再現である限りにおいて表音文字を評価するのである。

こうした思想は、ソシュールが言語学の体系から文字を捨象したことにも繋がっている。「言語と書〔文字〕とは二つの分明な記号体系である。後者の唯一の存在理由は、前者を表記することだ。言語学の対象は、書かれた語と話された語との結合である、とは定義されない。後者のみでその対象をなすのである[注19]」。

こうしたプラトン以来の西洋思想の系譜に「音声中心主義」を暴き出したのがデリダであった。「形而上学の全歴史はフォネー〔声〕の必然的特権を前提としている[注20]」。声あるいは音声言語（パロール）は、精神あるいはイデアに直接無媒介的

に結びつくものとして特権化され、その逆に、文字言語（エクリチュール）はつねに外在的ないし副次的なものとして見下されてきたとデリダはいう。しかし、われわれの観点からいえば、それは別に西洋に固有の言語観というわけではない。中国の伝統的な言語観にも似たような思想の脈流があったのだ。

では、中国の言語思想は、文字や書を見下すという思想の系譜に対して、アンチテーゼを提出してきたのだろうか。じつは、いわゆる中国哲学の本流において、文字や書を積極的に評価するものは見いだしがたい。たとえば『易経』を注釈した王弼は、同書「繫辞下伝」の「言は意を尽くさず」という論を継承発展させ、「意」と「言」とを媒介させるものとして「象」を位置づけた。

> 夫れ象は意より出づる者なり。言は象を明らかにする者なり。意を尽くすに象に若くは莫く、象を尽くすに言に若くは莫し。言は象より生ず、故に言を尋ねて以て象を観るべし。象は意より生ず、故に象を尋ねて以て意を観るべし。（『周易略例』名象）

しかし、ここであらたに提示された「意」―「象」―「言」という階層性において、注釈であるから当然とはいえ、「意」―「言」の主従関係はまったく揺らぐことなく、そこで「書」ないし「文」は完全に捨象されている。

中国において、言語思想に関連づけつつ「文」や「書」を積極的に価値づけようとしたのは、哲学の領域においてではなかった。断片的あるいは萌芽的なかたちであれ、そうした試みが見いだされるのは、文字論、文学論、書論といった、思想哲学の本流からすればむしろ周縁的な領域においてである。

だが、文字文化に支えられてきた中国の言語思想というものを理解しようとするとき、書字の問題を抜きにするこ

とは果たして可能だろうか。書字にまつわる思想を文字論、文学論、書論に尋ねるなら、そこにまったく独特なる言語哲学の地平が拓かれる可能性があるのではないか。

付記

本稿は、稿者の博士論文『書法思想史研究試論――文と書を軸にして』（二〇一五年）の「結論――文と書の力」（未公刊）をもとに、加筆修正の上、再構成したものである。

注

注1　ヘーゲル『エンチクロペディ』第四五九節、『精神哲学――哲学の集大成・要綱　第三部』長谷川宏訳、作品社、二〇〇六年、二九四頁。

注2　ヘーゲル『歴史哲学講義』上、長谷川宏訳、岩波文庫、一九九四年、二二二―二二四頁。強調は原文。

注3　和辻哲郎『孔子』岩波文庫、一九八八年、二七―二九頁。傍点は原文。

注4　ヘーゲル『エンチクロペディ』第四五九節、二九四頁。

注5　高野義弘によれば、甲骨文にみえる「史」は、固有名や使者の意味として使われており、書記官としての意味には用いられていない。書記官を意味する「史」は、西周中期以降の金文にはじめて現れる（「甲骨文史料の集計・分析を中心とする史字の再解釈」『歴史学研究』第九一六号、青木書店、二〇一四年）。

注6　平勢隆郎『都市国家から中華へ』中国の歴史、講談社、二〇〇五年、二一三頁。

注7　宮崎市定「中国の歴史思想」、礪波護編『中国文明論集』岩波文庫、一九九五年、二五九頁。

注8　「大史書して曰く、崔杼其の君を弑す、と。崔子之を殺す。其の弟、嗣ぎて書す。而して死する者二人。其の弟、又書す。すなわち之を舍（ゆる）す。南史氏、大史尽く死せりと聞き、簡を執りて以て往く。既に書せりと聞き、乃ち還る」（鎌田正『春秋左氏

伝』三、「新釈漢文大系」三二、明治書院、一九七七年、一〇四九頁）。

注9　原田種成『貞観政要』下、「新釈漢文大系」九六、明治書院、一九七九年、五六五頁。

注10　ライプニッツの中国への関心が示すとおり、当時（一七世紀末）のヨーロッパでは、一般に中国文化に対する尊敬があった。ところが一八世紀に入ると、法王庁の方針を受けてイエズス会の布教活動は衰退し、それに伴って中国を軽視する風潮が広まっていく。その結果、ヘーゲルのようなあからさまな蔑視へと至るのである。

注11　ライプニッツ『最新中国情報』序文、『ライプニッツ著作集』一〇、山下正男ほか訳、工作舎、一九九一年、九七頁。

注12　同前、九八頁。

注13　「天道」篇は、前漢末に淮南王劉安によって『荘子』が編纂された際、「外篇」に分けられたテクストであり、荘子自身の言葉であるかはわからない。池田知久は、「『荘子』という書物が、一人もしくは少数の思想家が一時もしくは短時に書き上げたものではなく、多数の道家系の思想家たちが戦国時代中期〜前漢時代、武帝期の約二百年間に、書き継いで成った全集の一種であることは、今日すでに十分に明らかだ」（「『荘子』の思想・作者・書物」、森三樹三郎訳『荘子』Ⅰ、中公クラシックス、二〇〇一年、三四―三五頁）という。

注14　プラトン『パイドロス』一六四頁。

注15　同前、一六七頁。

注16　同前、一六六頁。

注17　同前。

注18　ヘーゲル『エンチクロペディ』第四五九節、二九六頁。

注19　フルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義』小林英夫訳、岩波書店、一九四〇年、四五頁。

注20　ジャック・デリダ『声と現象』林好雄訳、ちくま学芸文庫、二〇〇五年、三三頁。